『源氏物語』における喪服描写と物語展開

津々見　彩

はじめに

『源氏物語』には、登場人物の衣装に関する描写が多数存在する。それらの中には絢爛豪華で目に鮮やかな衣装についての描写ももちろん見られるが、喪服のように地味で映えの無い色合いの衣装についても詳しく描写されている。中でも『源氏物語』では、後者のような喪服姿が高く評価されている場面も多く見られる。次に一例を引く。

無紋の上の御衣に鈍色の御下襲、櫻巻き給へるやつれ姿、華やかなる御装ひよりもなまめかしさまさり給へり。（葵・三二七頁）[1]

これは光源氏が、葵上の喪に服している場面である。傍線を付したように、喪服に身をやつした姿が、「華やかなる御装ひよりもなまめかし」いとされている。

このような描写について、これらを「墨染の美」と称し、平安期の他作品との比較を通して緻密な調査をされた伊原昭氏をはじめ、先行研究においては、いずれも、『源氏物語』に見られる高く評価される喪服姿というのは特異な描写であるとされている[2]。

それではいったいなぜこのように特異な描写がされているのか。例えば伊原氏は、「墨染の美」が主要人物の「内在の美」を引き出しており、服色が人物と「緊密な連関」を持っていると述べられている。また、山西陽子氏は、服喪の場面を分析された上で、喪服姿が美的表現を伴って描かれている場合、そこに「なんらかの事情」が隠されており、これによって物語の深みが増していると指摘された[3]。

これらの御論について大きく異論はない。しかし、なぜその「内在の美」が描かれるのか、ということについて伊原氏は言及されていない。山西氏も、全ての用例に共通した、「内在の美」が描かれる要因については述べられてい

ない。

そこで本稿では、このような描写と物語展開との関わりについて、特に「服喪の対象人物」に注目しながら分析し、それがどのように物語に影響しているか考えていきたい。

一、高く評価される喪服姿

『源氏物語』内で喪服姿が高く評価されている場面は十五例見られる。以下にそれらの場面を引く。なお、波線部が喪服姿の描写で、傍線部がそれらを評価している描写である。

① 鈍色のこまやかなるがうち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐ給へるがいとうつくしきに

（若紫・一九五頁）

② 鈍める御衣たてまつれるも夢の心ちして、われ見立たましかば、深くぞ染め給はまし、とおぼすさへ、

限りあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

とて、念誦し給へるさま、いと、なまめかしさまさりて

（葵・三一三頁）

③ 中将の君、鈍色のなをし、指貫うすらかに衣がへして、いとお、しうあざやかに心はづかしきさましてまいり給へり。

（葵・三一八頁）

④ これは、いますこしこまやかなる夏の御なをしに、紅のつや、かなるひき重ねて、やつれ給へるしも、見ても飽かぬ心ちぞする。

（葵・三一八頁）

⑤ ほどなき袒、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、萱草の袴など着たるもおかしきすがた也。

（葵・三二二頁）

⑥ 無紋の上の御衣に鈍色の御下襲、櫻巻き給へるやつれ姿、華やかなる御装ひよりもなまめかしさまさり給へり。

（葵・三二七頁）

⑦ 藤の御衣にやつれ給へるにつけても、限りなくきよらに心ぐるしげなり。

（賢木・三五三頁）

⑧ 黒き御車のうちにて、藤の御袂にやつれ給へれば、ことに見え給はねど、ほのかなる御ありさまを、世になく思きこゆべかめり。

（賢木・三六九～三七〇頁）

⑨ こまやかなる鈍色の御なをし姿にて、世中のさはがしきなどことつけ給て、やがて御精進なれば、数珠ひき隠して、さまよくもてなし給へる、尽きせずなまめかしき御ありさまにて、御簾のうちに入り給ぬ。

（薄雲・二四〇頁）

⑩ 鈍たる御衣どもなれど、色あひ、重なり好ましくなかなか見えて、雪の光にいみじく艶なる御姿を見出だして、まことに離れまさり給はば、と忍びあへずおぼさ

る。

⑪ 薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、例に変はりたる色あひにしも、かたちはいとはなやかにもてはやされておはするを、［中略］宰相の中将、おなじ色のいますこしこまやかなるなをし姿にて、櫻巻き給へる姿しも、またいとなまめかしくきよらにておはしたり」（藤袴・九一頁）

⑫ 濃き鈍色の単衣に萱草の袴もてはやしたる、中／＼さまかはりて、はなやかなりと見ゆるは、着なし給へる人からなめり。（椎本・三七五頁）

⑬ 黒き袷一襲、おなじやうなる色あひを着給へれど、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心ぐるしうおぼゆ。（椎本・三七六頁）

⑭ 月ごろ黒くならはしたる御姿、薄鈍にて、いとなまめかしくて、中の宮はげにいと盛りにて、うつくしげなるにほひまさり給へり。（総角・三九七頁）

⑮ 黒き御衣にやつれておはするさま、いとゞらうたげにあてなるけしきまさり給へり。（宿木・二一九頁）

これらをa評価される人物、b服喪の対象人物、c評価する人物についてまとめると次の［表一］のようになる。

［表一］喪服姿を高く評価される・する人物とその時の服喪の対象人物

	a評価される人物	b服喪の対象人物	c評価する人物
①	若紫	北山の尼君	源氏
②	源氏	葵上	語り手
③	中将の君	葵上	語り手
④	源氏	葵上	語り手
⑤	あてき（女童）	葵上	源氏
⑥	源氏	葵上	語り手
⑦	源氏	桐壺院	語り手
⑧	源氏	桐壺院	芝刈り人たち
⑨	源氏	藤壺宮	語り手
⑩	源氏	藤壺宮	紫上
⑪	玉鬘、宰相の中将（夕霧）	大宮	女房たち
⑫	中君	八宮	薫
⑬	大君	八宮	薫
⑭	中君	八宮	大君
⑮	女二宮	藤壺女御（麗景殿女御）	今上帝

次節にて、bの中でも特に、①の北山の尼君、②③④⑤⑥の葵上、⑪の大宮、⑫⑬⑭の八宮について、その死が及

ぼす影響を見ていく。なお、残りの⑦⑧⑨⑩については、「三、物語構造との関連」において触れることとする。

二、服喪の対象人物

二‐一、北山の尼君

まず北山の尼君から見ていく。北山の尼君は、若紫の祖母であり、その面倒を見ている人物である。源氏が若紫の姿を垣間見し、彼女を引き取りたいと申し出た時、尼君は最初若紫の幼さを理由に断った。だが、尼君は自分がいよいよ死に直面した時、見舞いに訪れた源氏に自分がいなくなった後の若紫のことを頼むよう変化する。この後まもなくして実際に尼君は亡くなり、源氏は若紫を引き取ることになる。

若紫を引き取りたいという源氏の申し出を一度は断った尼君が翻意するのは、自分の死を強く意識したからであった。このように北山の尼君の死は、源氏最愛の女君と言われる紫上を源氏のもとに引き取らせる一つの契機となっているのである。

二‐二、葵上

葵上と源氏の夫婦仲は、周知のとおり良好と言い難い描き方をされている。だが、葵上の死を悼む場面は非常に長く、大きく分けて、**ア**野辺送り、**イ**左大臣邸での読経、**ウ**三位中将（頭中将）との追慕、**エ**大宮と和歌の贈答、**オ**葵上付女房達との追慕、が描かれている。

アでは野辺送りで父左大臣が嘆き悲しみ、源氏はそれを見て「おとゞの闇にくれまどひ給へるさまを見たまふもことはりにいみじけれ」と思い、和歌を詠んでいる。**イ**で源氏の強い弔意を示し、**ウ**、**エ**、**オ**ではそれぞれ頭中将、大宮、葵上付の女房らと共に、葵上を悼んでいる。

これは、二人の夫婦関係を考えると、違和感を覚えるほどの悲しみようである。もちろん最後には夕霧を産んでから亡くなったことなどからわかるように、二人はお互いに対してまったく愛情がなかったというわけではないだろう。だが、それにしても葵上に対する長い服喪の表現は、非常に印象的である。

ではなぜそれほどまでに葵上の死は印象深く描かれなければならなかったのか、これについて、小池清治氏は「『源氏物語』においては、［中略］死を結接点として物語が腸詰のように、括りを作りつつ、延々と紡ぎ出されていくのである。［中略］葵の上の死とそれを悼む長い弔意の表現は、『紫の上の物語』を生み出す、長い長い助走なのであった」と述べられている[4]。要するに、不自然なほどに長く、印象付けられた葵上の死は、その次から始まる源氏最

愛の女君と言われる紫上の物語につなげるための表現技法だったということである。また、葵上の死の機能に関して、山田利博氏は、源氏と左大臣家が結びつくために葵上と一度は結ばれなければならなかったが、「その存在がいつまでもあったのでは紫上が割り込む隙がない」ために、葵上を「源氏に惜しませつつ死なすしか」なかったのだと述べられている[5]。従うべきだろう。

そもそも葵上というのは、死ぬことを前提に造型された人物であると言っても過言ではないだろう。葵上が死ぬことによって、物語にいかなる影響が及ぶのであろうか。

まずは当然のことながら、紫上が源氏の正妻格として物語の中心に据えられることが挙げられる。仮に葵上が死なずに生きながらえたとすると、紫上が「源氏の正妻格」という立場にはなり得ない。葵上が死ぬことによって初めて紫上は源氏の正妻格となり得たのである。

さらに、前にも述べたように源氏は左大臣家の人々と共に葵上の死を悼み、その悲しみを共有している。この悲しみの共通性ゆえに、本来切れてしまうはずの源氏と左大臣家の連帯は逆に強くなったと考えられる。また、夕霧という葵上の忘れ形見の存在が、それに拍車をかけたと言えるだろう。吉井美弥子氏は「葵の上が亡くなり、その悲しみを全身で受けとめつつ左大臣家との結びつきを確認する光源氏は、左大臣家の婿である時よりもさらに自由な立場を獲得し、左大臣側に組み込まれることなく、しかも左大臣側と連帯するというきわめて特異な立場を手に入れることになったのである」と指摘されている[6]。

このように葵上の死は源氏と左大臣家、ひいては左大臣家の血を引く頭中将とのつながりを強める役割をも果たしていると言えるだろう。

二-三、大宮

夕霧と雲居雁は、双方大宮の孫であり、幼いころから親密な関係にあった。だがそれを知った内大臣が、「思はずなることの侍ければ、いとくちをし」く、「ゆかりむつび、ねぢけがましきさま」であるとして二人を引き離したのである（少女・二九六頁）。だが、夕霧が立派に成長し、さらには中務宮から縁談の話が来ているらしいという噂を耳にした内大臣は、「いかにせまし、なをや進み出でて気色を取らまし」（梅枝・一六九頁）と、自ら折れて夕霧を婿に迎えるべきだったかと考えるようになる。

しかし最初に内大臣の方から夕霧を突っぱねた以上今さらそんなこともできず、どうしたものかと悩んでいる折に執り行われた大宮の法要を足掛かりに、内大臣は夕霧と打ち解ける機会を見出すのである。

やよひ廿日、大殿の大宮の御忌日にて、極楽寺に詣で給へり。［中略］（内大臣は夕霧の）袖を引き寄せて、「などか、いとこよなくは勘じ給へる。今日の御法の縁をも尋ねおぼさば、罪ゆるし給ひてよや。残り少なくなり行末の世に思ひ捨て給へるも、恨きこゆべくなん」との給へば、うちかしこまりて、「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、うけ給をくこと侍しかど、ゆるしなき御けしきに憚りつゝなん」と聞こえ給。

（藤裏葉・一七七～一七八頁）

緊張状態にあった二人の関係は大宮の法要で緩和され、この後内大臣が自ら主催する藤花の宴に夕霧を招き雲居雁とのことを許すという流れが可能になったのである。この流れについて、小池清治氏も「正編第一部の終りの巻となる『藤裏葉』は夕霧と雲居雁の祖母、養育者である大宮の死を悼んでの法事の描写を冒頭に置く。この法事が縁となり、こじれきっていた内大臣（頭中将）と夕霧との関係が修復される。すなわち、大宮の死が夕霧と雲居雁という夫婦を誕生させたのだ。物語レベルで言えば、この死は『夕霧と雲居雁の物語』の母体となっているといえよう」と述べられている[7]。つまり、大宮の法要は夕霧と内大臣の和解、ひいては夕霧と雲居雁の婚姻を導いているのである。

さらに、大宮の死にはもう一つ役割があったと考えられる。玉鬘と鬚黒の縁談である。

源氏は玉鬘の素性を隠し通すことに限界を感じており、源氏は、

おりあしきを、いかにせまし、とおぼす。世もいと定めなし、宮も亡せさせ給はば、御服あるべきを知らず顔にてものし給はむ、罪深きこと多からむ、おはする世にこのことあらはしてむ、とおぼし取りて、三条の宮に御とぶらひがてら渡りたまふ。

（行幸・六二～六四頁）

と、傍線部のように、玉鬘の素性を明かさないうちに大宮が亡くなることで、玉鬘が大宮の喪に服することが出来ず、この世の理に背くことになるのは「罪深きこと多からむ」と考えた。これを恐れた源氏はやはり大宮が「おはする世にこのことあらはしてむ」と決心する。つまり、源氏は大宮の死がもたらすであろう結果を恐れ、玉鬘の裳着、ひいては素性を公開することを決めるのである。

そしてその結果、玉鬘が内大臣の娘だと知った鬚黒は次のように考える。

大将は、この中将はおなじ右のすけなれば、常に呼びとりつゝ、ねんごろに語らひ、おとゞにも申させ給けり。［中略］かのおとゞも、もて離れてもおぼしたらざなり、女は宮仕へをものうげにおぼいたなり、とう

ち〳〵のけしきもさるくはしきたよりあれば、漏り聞きて、「たゞ大殿の御おもむけのことなるにこそはあなれ。まことの親の御心だに違はずは」と、この弁の御もとにもせめたまふ。（藤袴・一〇一～一〇二頁）

傍線部のように、鬚黒はかねてより懇意であった柏木を通し自分が内大臣に悪印象を持たれてはいないことを知る。そして、自分のことは養父である源氏の「御おもむけのことなる」だけであり、実父である内大臣の「御心だに違はずは」と考え、玉鬘への求婚に強気になった。このように、源氏が大宮の死を強く意識したことで玉鬘は素性を公開することになり、ひいては鬚黒が玉鬘を強引に勝ち取ることになったのである。つまり、大宮の死は玉鬘と鬚黒の結婚の契機にもなったと言えるのだ。

このように大宮の死は、夕霧と雲居雁、玉鬘と鬚黒の結婚の促進に大きく関与していると言えるだろう。

二-四、八宮

八宮は、姫君たちの唯一の保護者であった。そして、薫にとっても八宮は法の師として大きな存在であった。周知のとおりその出生に陰のある薫は、幼いころから道心が深く、出家を志していた。そんな薫にとって八宮は、「やう〳〵見馴れたてまつり給たびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどして程経る時は、恋しくおぼえ給」（橋姫・三一一頁）ような存在であった。

八宮の方も薫に対し親しみを覚えており、それは生前、薫に対して自分が亡くなった後の姫君たちの後見を頼むほどであった。薫はこれを承諾し、その言葉通り、薫は、八宮死後の姫君たちを世話している。この時邸の主人であった八宮は亡くなっているので、薫の対応をするのは姉の大君である。さらに薫は折に触れて宇治を訪ね、大君と対面して和歌を詠みかわすなどしながら、お互いに慰めあっている。

そして、その年の暮れに薫が宇治を訪問し、大君と対面した時のことが、次のように描かれている。

対面し給ことをば、つゝましくのみおぼいたれど、思隈なきやうに人の思給へれば、いかゞはせむとて聞こえ給。うちとくとはなけれど、さき〳〵よりはすこし言の葉つゞけて、ものなどの給へるさま、いとめやすく心はづかしげなり。かやうにてのみはえ過ぐしはつまじ、と思なり給も、いとうちつけなる心かな、なを移りぬべき世なりけり、と思ゐ給へり。（椎本・三六七頁）

大君と慰め合ううちに、傍線部のように薫は大君に対して恋心を抱くようになった。父として、師として、仰ぎ頼

りにしていた八宮の死は、薫に姫君たちへの、特に接する機会の多い大君への同情を起こさせた。そして共に大きな支えを失ったという悲しみの共有を通し、ついには恋心を抱かせる大きな要因となったのである。

また、八宮の死はもう一つ大きな役割を果たしている。中君と匂宮の結婚についてだ。中君は八宮生前から匂宮と文を交わしていたが大きな接触はなく、この二人の物語が動き出すのはやはり八宮が亡くなってからであった。先にも述べたように、薫が八宮の死をきっかけに大君との関係を深めたいと思うようになるのだが、大君は自分ではなく妹である中君と薫を結婚させたいと考える。しかし薫はこれを良しとせず、「かのいとをしく、うちうちに思たばかり給ふありさまも違ふやうならむもなさけなきやうなるを、さりとて、さはたえ思ひあらたむまじくおぼゆれば、譲りきこえて、いづ方のうらみをも負はじ」（総角・四一一頁）と考え、匂宮を伴って宇治に向かい、匂宮と中君は契を交わすこととなった。

さらに、新婚第三夜に匂宮が母明石中宮から諫められた際、薫が「おなじ御さはがれにこそはおはすなれ。こよひの罪にはかはりきこえて、身をもいたづらに侍なむかし。木幡の山に馬はいかゞ侍べき。いとゞものの聞こえや、障り所なからむ」（総角・四二二頁）と匂宮を宇治に送り出している。薫は、中君と匂宮の結婚の立役者であると言えるだろう。

薫は八宮の遺言により宇治の姫君たちの後見となっているが、中君の結婚に多く関わることで、より中君と薫の連帯は強くなったのではないだろうか。

このように、八宮の死を発端とする一連の流れによって、薫と大君、中君と匂宮、そして中君と薫の縁をも深めることになったのである。

三、物語展開との関連

ここまで見てきたように、どうやら、高く評価される喪服姿が描かれる時、その服喪の対象人物というのは、ある二人の縁を結ぶ、あるいは深めるという効果をあげているようだ。前節では詳述しなかったが、このことは⑦⑧の桐壺院、⑨⑩の藤壺宮、⑮の藤壺女御（麗景殿女御）にも言える[8]。これを、「服喪の対象人物」と、それらの人物によって影響を及ぼされた人々にまとめると次の**［表二］**のようになる。表中の**A**～**J**はそれぞれ縁を結ばれた、あるいは深められた組み合わせを示すものである。

[表二] 服喪の対象人物と影響を及ぼされた人々

服喪の対象人物	縁を結ばれた・深められた組み合わせ
北山の尼君 葵上 桐壺院 藤壺宮 大宮 八宮 藤壺女御（麗景殿女御）	A源氏と若紫 A源氏と紫上、B源氏と頭中将（左大臣家） C源氏と明石姫君、D源氏と冷泉帝 D源氏と冷泉帝、A源氏と紫上 E夕霧と雲居雁、F玉鬘と鬚黒 G薫と大君、H中君と薫、I中君と匂宮 J女二宮と薫

[表二] を一瞥した時、実に興味深い事実に気付く。「一、**高く評価される喪服姿**」に掲げた **[表一]**「a評価される人物」、あるいは「c評価する人物」と、**[表二]** の「縁を結ばれた・深められた組み合わせ」に現れる人物が、多く重なっているのである。より分かりやすくなるよう、**[表一]** の「b服喪の対象人物」によって縁を深められた人物に網掛けを付し、**[表三]** として次に掲げよう。

[表三] [表一] に [表二] を反映させたもの

	a評価される人物	b服喪の対象人物	c評価する人物
①	若紫	北山の尼君	源氏
②	源氏	葵上	語り手
③	中将の君	葵上	語り手
④	源氏	葵上	語り手
⑤	あてき（女童）	葵上	源氏
⑥	源氏	葵上	語り手
⑦	源氏	桐壺院	語り手
⑧	源氏	桐壺院	芝刈り人たち
⑨	源氏	藤壺宮	語り手
⑩	源氏	藤壺宮	紫上
⑪	玉鬘、宰相の中将（夕霧）	大宮	女房たち
⑫	中君	八宮	薫
⑬	大君	八宮	薫
⑭	中君	八宮	大君
⑮	女二宮	藤壺女御（麗景殿女御）	今上帝

こう見ると、「b服喪の対象人物」が縁を結ぶ、あるいは深める人物というのは、喪服姿を高く評価されている、あるいは評価している人物と重なっていることが一目瞭然

である。つまり、この物語において「a喪服姿を高く評価される」、あるいは「c評価する」人物は、どちらかが必ず、その「b服喪の対象人物」によって、誰かと縁を結ばれる、あるいは深められるという効果を享受する人物だということである。

では、それらの人物たちは、縁が結ばれた、あるいは深められたことによりどうなっていったのか、**[表二]**のA～Jに基づいて見ていく。なお、AとB、GとHとI、そしてJについてはそれぞれ相互に関係しているので共に見ていきたい。

三-一、源氏、紫上、頭中将（A～D）

まず源氏について見てみる。周知のとおり源氏を寵愛する桐壺帝と時の左大臣が結託し、左大臣が「たゞ一人かしづきたまふ御むすめ」（桐壺・二五頁）である葵上と源氏が、結婚することで、源氏は左大臣家という強力な後見を得ることができた。また、源氏が左大臣家、そして頭中将と連帯したことは、源氏だけでなく左大臣家にもメリットのあることだった。そもそも源氏と葵上の婚姻は、源氏が後ろ盾を得るためのものでもあったが、左大臣家にも、時の帝である桐壺帝の寵愛を受けている源氏との連帯を深める意図があったことが指摘されている[9]。葵上の死という悲しみを共有することによって、その連帯が強まったことは「二-二」でも述べたとおりである。

また、頭中将と源氏については、澪標、絵合巻の斎宮女御と弘徽殿女御の立后争いを契機とした対立がしばしば指摘されているが、これは頭中将が源氏の敵対勢力である右大臣家の婿となったためであり、ある程度は仕方のないことであろう。しかも、最終的には夕霧と雲居雁の婚姻を通して融和しており、源氏が「権中納言、大納言になりて右大将かけ給へるを、いま一きわあがりなむに、何事も譲りてむ」（薄雲・二三九頁）と言っていたとおり、藤裏葉巻で源氏が准太上天皇になるのと共に、頭中将も内大臣から太政大臣へと昇進している。これは頭中将と源氏の強い連帯が大きな後押しとなっていると言えるだろう。このように、頭中将と源氏の連帯は、双方的にメリットを得ることになっているのである。（B）

そして北山の尼君死去により引き取った若紫との関係も、葵上の死去で深いものとなった。さらに藤壺宮の死去により「据え直し」がなされた紫上は世間からも源氏の正妻格として見られていたと考えて良いだろう。（A）

紫上が正妻格となったことによるメリットとはなんだったのだろうか。それは明石姫君入内についてだと考えられる。

明石姫君の母である明石御方は、その身分の低さが強調されている女君である。Cによって源氏が明石姫君を得る必然性を得ていたとしても、明石姫君自身の後見が十分でないのでは意味がない。このことにより後宮で苦労することは、物語最初の桐壺更衣の状況を考えればよくわかる。明石御方の母尼君もこれを例に出し、「母方からこそ、みかどの御子もきわ／＼におはすめれ。このおとゞの君の、世に二つなき御ありさまながら、世に仕へ給はば、故大納言のいまひときざみなり劣り給て、更衣腹と言はれ給しけぢめにこそおはすめれ。ましてたゞ人はなずらふべき事にもあらず。又親王たち、大臣の御腹といへど、猶さし向かひたる劣りの所には、人も思ひおとし、親の御もてなしもえひとしからぬものなり」（薄雲・二一八頁）と明石御方に姫君を養女に出すよう説得している。なお、趙暁燕氏は、『源氏物語』では「口惜し」という語には「出自の辺境性」を惜しむニュアンスが見られるものとされている。そしてその上で、源氏が、明石姫君の誕生、五十日の祝い、裳着の折に「口惜し」と言っており、姫君が受領階級の娘の子であることを残念に思っていると述べられている[10]。

紫上は劣り腹ではあるものの、兵部卿宮の娘、つまり皇族の血を引く娘である。その血統は明石御方と比べるべくもない。また、前にも述べたように、紫上は源氏の正妻格として世間から認められている。紫上が明石姫君の養母となることで、明石姫君の後宮での立場は強固なものとなったと言えるだろう。

そして、このように源氏や明石姫君の権力体制が確固になればなるほど、源氏の正妻格であり、明石姫君の養母である紫上の立場は連動して上昇していくのである。

さらに、桐壺院の死と藤壺宮の死はDの冷泉帝と源氏の結びつきを深めているが、桐壺院はその遺言により冷泉帝の即位を確かなものとしたのは前に述べたとおりである。また、藤壺宮の死によって冷泉帝が源氏に「太上天皇になずらふ御位」（藤裏葉・一九二頁）を与えるという考えを得るに至る契機（薄雲・二三五～二三七頁）となったと言って良いだろう。

ここで思い出したいのが桐壺巻にあった高麗の相人の観相と、澪標巻の宿曜である。それぞれの場面を次に引く。

「国の祖と成て、帝王の上なき位に上るべき相をはします人の、そなたにて見れば乱れ憂ふることやあらむ。おほやけのかためと成て、天下をたすくる方にて見れば、又その相たがふべし」と言。（桐壺・二〇頁）

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と

勘へ申たりし事、さしてかなふなめり。

（澪標・一〇〇～一〇一頁）

この観相は多く准太上天皇という位を指しているとされる[11]。そして三人の御子というのは、言うまでもなく、冷泉帝、明石姫君、夕霧のことを示している。

ここまで見てきたように、物語の第一部において、喪服姿を高く評価された源氏は、**[表二]**で見たとおり、A紫上、B頭中将（左大臣家）、C明石姫君、D冷泉帝との関係を強化している。また、そのことが、源氏の正妻格の地位を安定させ、左大臣家との連携を強め、明石姫君という後に中宮となる娘を得ることとなり、冷泉朝、今上朝の後見として影響を及ぼすことを必然化する。つまり、この物語は、評価される喪服姿を描くことでこの二つの予言が成立していく過程を描いているのである。いわば、喪服の美が、源氏の栄華への道のりを示唆しているのだ。

三-二、夕霧（E）

Eの夕霧と雲居雁の結婚について、熊谷義隆氏は、「春宮の母承香殿女御の兄である鬚黒を、内大臣の娘でありながら光源氏は婿に取った形になるのである。[中略]春宮の許には明石姫君を入内させる。その春宮を支え、次代の権力を掌握する鬚黒との政治的関係を結ぶことが出来たのである」と述べられている。また、夕霧と雲居雁の結婚については、「そもそも雲居雁は、少女巻で前斎宮女御の立后という事態を受けて、内大臣が急遽考えた春宮の入内候補として登場してきた。その雲居雁と夕霧の結婚は、明石姫君に対抗する有力な入内候補をなくすことになる。[中略]すなわち、二つの結婚がもたらしたものは、明石姫君の入内とその将来を安泰にすることだったのである。」とされている。つまり、この二つの結婚によって、「明石姫君の入内とその将来」が「安泰」なものになったのである[12]。

また、明石姫君の入内、そして立后を確かなものにするということは、その兄である夕霧の権力基盤をも確実なものとすることに繋がるといって良いだろう。

この婚姻により、源氏は「長からずのみおぼさるゝ御世のこなたに、とおぼしつる御まいりの、かひあるさまに見たてまつりなし給て、心からなれど、世に浮きたるやうにて見ぐるしかりつる宰相の君も、思なくめやすきさまに静まり給ぬれば、御心落ちゐはて給て、今は本意も遂げなんとおぼしなる。[中略]みなとり／／にうしろめたからずおぼしなり行」（藤裏葉・一九二頁）と、宿願であった明石姫君の立后や懸念していた夕霧の婚姻が成立したことに安堵し、その次の年の秋、ついに「太上天皇になずらふ御位」（藤裏葉・一九二頁）を受ける。そして前にも述べた

ように、それを受けて内大臣も太政大臣へと昇進することとなった。

つまり、夕霧と雲居雁の婚姻は、夕霧が准太上天皇の息子という立場と、娘婿として太政大臣という後ろ盾を得ることにも繋がっているのである。

三-三、玉鬘（F）

玉鬘は紫上と同じく、身分の高い父と、その妾である身分違いの母の間に産まれた。また正妻に目の敵にされており、頭中将の支援を受けることも出来ずにいた。さらに、夕顔は幼い玉鬘を残して亡くなってしまい、玉鬘は乳母に連れられ筑紫に下ることとなってしまった。しかし玉鬘は成長した後再び上京し、源氏の養女として引き取られる。そして、「二-三」で見たように鬚黒大将と結婚することとなる（F）。

鬚黒は東宮（後の今上帝）の外戚であり、後の太政大臣である。そのような鬚黒の正妻となったことで、玉鬘は安定した立場を得たと言えるだろう。さらに、鬚黒が亡くなった後も、次のように子息たちは出世しており、娘たちも多くの人々から懸想されていた。

おとこ君たちは御元服などして、をの〳〵をとなびたまひにしかば、殿のおはせでのち、心もとなくあはれなることもあれど、をのづからなり出で給ひぬべかめり。姫君たちをいかにもてなしたてまつらむとおぼし乱る。［中略］かたちいとようおはする聞こえありて、心かけ申給人多かり。　（竹河・二五三～二五四頁）

また、

む月のついたちごろ、かむの君の御はらからの大納言、高砂歌ひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、真木柱のひとつ腹などまいり給へり。右のおとども御子ども六人ながらひき連れておはしたり。（竹河・二五六頁）

と、「大勢の権勢家たちから年始の挨拶を受け」ており、「今も太政大臣の後室として重んじられている」[13]のである。幼いころの不遇な状況からすれば比べものにならないほど、その立場は上昇していると言えるだろう。

三-四、薫、大君、中君、女二宮（G～J）

薫はその出生に陰のある人物であるとは言え、表向きは准太上天皇源氏の息子であり、世間の評判はもともと非常に高かった。宿木巻で今上帝が女二宮の婿に薫が良いのではと考える要因の一つとして、「もとより思人持たりて、聞にくき事うちまずまじくはたあめるを、つゐにはさやうの事なくてしもえあらじ、さらぬ先に、さもやほのめかしてましなど、おり〳〵おぼしめしけり」（宿木・三一頁）

ということがある。大君の存在によって宇治に心が向いていた薫は都で「思人」を持つことなく、その結果として都での評価を高めることになり、在位の天皇の内親王降嫁という栄誉にあずかることとなる。（J）

また、内親王の降嫁というと、若菜上巻の女三宮の降嫁が思い出される。しかし女三宮の場合、朱雀院は譲位後であり病身であったが、この場合はそうではない。これに関して細野はるみ氏が「この降嫁決定の主因はあくまでもそれを受ける側の薫にある。帝までもが、当代一の臣下である夕霧とともに娘婿として薫を競う、そして彼は前例のないような降嫁を受ける、それにより、否応なく薫の世評は高まっていく」と述べられている[14]。

このように在位中の天皇の内親王の降嫁というのは非常に珍しく、これは娘である六の君の婿に薫を、と考えていた夕霧が「女子うしろめたげなる世の末にて、みかどだに婿求め給ふ世に、ましてたゞ人の盛り過ぎんもあいなし」（宿木・三三三頁）と言っていることからもわかる。この縁談により内親王を妻に得た薫は世間からの評判がいっそう高まり、その家格が格上げされているのだ。

そして、女二宮はこのように、「内親王降嫁」という栄誉を薫に与えることで、母である藤壺女御（麗景殿女御）を亡くし、内親王でありながら後見を持たず非常に不安定な立場に陥ってしまっていた状態から、「ポスト夕霧」[15]と言われている次代の権力者である薫の正妻という形で、強力な後見を得ることができたのだ。

また、薫と中君が強く連帯した状態（H）で中君と匂宮が結婚した（I）ことで、薫は次々期東宮と目されている匂宮の正妻である中君の後見としての立場を確固としたものにしたのである。

そして大君と中君は、零落した親王である八宮の娘として、長い間宇治で細々とした暮らしをしていた。しかし中君は、匂宮と結婚した（I）後、京に呼び寄せられ、匂宮の第一子を産むことになる。婚姻の折、匂宮は中君に「もし思ふやうなる世もあらば、人にまさりける心ざしの程、知らせたてまつるべき一ふしなんある」（宿木・五四頁）、つまり自分が即位した際は中君を中宮に立てると述べている。中井賢一氏のご論によると、これは明石中宮によって若宮が「公的に」認知されたことで「現実味を帯びて」きたとされている[16]。これには当代一の権力者である夕霧の後継者と目される薫を後見に持っている（H）ことも大きな武器となることだろう。

零落した親王の娘として都の権力から遠く離れていた中君は、匂宮（I）と薫（H）との縁が深まったことによって、都の権力体制の中枢に身を置くことになったのだ。

また「二-六」でも少し触れたが、大君は父である八宮が亡くなった後は、八宮家の女主人としてふるまっている。これは、八宮生前時でも、八宮が不在であれば大君が訪問客である薫の対応をしていたことからもわかるだろう。このような大君は、父八宮から、宮家としての誇りも受け継いだと考えられる。繰り返しになるが、八宮が亡くなり、大君が薫を強く惹き付けた（G）ことによって、中君と匂宮の結婚が成立した。そしてこの結婚により、八宮直系の娘である中君は都で大きく上昇することとなる。つまり、Gの大君と薫の縁の深まりが中君の、ひいては大君が代表した八宮家の上昇に繋がったのである。

ここまで見てきたように、高く評価される喪服姿というのは、それを評価された、あるいは評価した人物の、その後の政治的上昇を示唆していると考えられる。

そしてこれには、喪服姿が高く評価されている時の「服喪の対象人物」が大きく関わっている。ある人物が亡くなり、その亡くなった人物のために喪服を着ている人物が美しいと評価される。そうすると、その評価された人物、あるいは評価した人物は、「服喪の対象人物」が亡くなった影響を受けて、その後の自分の政治的上昇に繋がる人物との縁が結ばれる、あるいは深まるのである。

おわりに

本稿では高く評価される喪服姿が描かれる理由を、その時の服喪の対象人物が果たす役割に注目しながら分析した。その結果、服喪の対象人物はその死をもって喪服姿を高く評価される、あるいは高く評価している人物と、その後の政治的上昇に繋がるような人物との縁を結ぶ、あるいは深める、という影響を及ぼしていることがわかった。

つまり、『源氏物語』における喪服姿の表現の「特異」性は、喪服姿を高く評価された、あるいは評価した人物が、その時の「服喪の対象人物」の及ぼす影響によって、その後政治的に上昇していくことを示唆するための技法だったのである。

注

1　本文及び頁数は『新日本古典文学大系』（岩波書店）本に拠る。底本は飛鳥井雅康等筆本（通称大島本。但し、それを欠く浮舟巻のみ明融本）。また、『源氏物語』本文、あるいは論文の引用中の傍線は稿者が付したものである。以下同断。

2　伊原昭氏「墨染めの美」（『平安朝文学の色相―特に散文作品について』、笠間書院、一九六七年）、沢田正子氏「源氏物語の非充足の美」（『源氏物語の美意識』笠間書院、一九七九

年）、山西陽子氏「『源氏物語』における喪服の描写方法」（「大谷女子大国文」三十四号、二〇〇四年、三月）など。なお、伊原氏はこのご論の中で、『源氏物語』を含む平安期の文学作品二十一作を調査され、このように高く評価される墨染（この場合僧衣も含む）の用例は、『源氏物語』以外の二十作品中わずか九例であるのに対し、『源氏物語』中では倍以上に及ぶ二十三例見られるということを述べられている。このことから、喪服姿を高く評価するという表現は明らかに特異なことであると言えるだろう。

3　注2の山西論文に同じ。

4　小池清治氏「『源氏物語』を展開させる原動力としての死」（「宇都宮大学国際学部研究論集」九号、二〇〇〇年、三月）

5　山田利博氏「死に続ける女・葵上―その機能的側面からのアプローチ―」（「国文学研究」一一四号、一九九四年、一〇月）

6　吉井美弥子氏「葵の上の『政治性』とその意義」（上原作和編『人物で読む源氏物語　葵の上・空蟬』勉誠出版、二〇〇五年）

7　注4に同じ。

8　桐壺院は須磨で立ち往生している源氏の夢枕に立ち、明石入道の迎えに従うことを促した。これによって明石御方と出会い、周知の通り後に中宮となる明石姫君の誕生へとつながる。また、桐壺院は朱雀帝に源氏を朝廷の後見として頼ることと東宮（後の冷泉帝）の即位を頼んでいる。さらに死後には朱雀帝の夢枕にも立ち、遺言に従うように促した。藤壺宮はその死を契機に冷泉帝が出生を知り、これにより源氏をさらに重用するようになる。なお、武原弘氏は「第一部の紫の上について―存在の孤独と不安―」（『源氏物語の展望』（第四輯）三弥井書店、二〇〇七年）において、藤壺宮の死によって紫上は「藤壺の「ゆかり」即「形代」の存在から解放され、彼女の独自存在として源氏に愛される位境にあり得」たとされている。藤壺女御（麗景殿女御）の死によって、女二宮は有力な後見がいなくなった。今上帝はこれを不憫に思い、次代の権力者であり、同じく降嫁した内親王である女三宮を母に持つ薫のもとへ、女二宮を降嫁させることを決めた。

9　注6に同じ。

10　趙暁燕氏「『源氏物語』における明石姫君の人生儀礼―裳儀による転身と越境」（『東アジア研究』十三号、二〇一五年）

11　浅尾広良氏「『太上天皇に准ふ御位』孜」（『源氏物語の視界』四、新典社、一九九七年）、森一郎氏「准太上天皇光源氏」（『源氏物語の方法と構造』和泉書院、二〇一〇年）など。

12　熊谷義隆氏「少女巻から藤裏葉巻の光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意志―」（『源氏物語の展望』（第一輯）三弥井書店、二〇〇七年）

13　『源氏物語』四（新日本古典文学大系二二）脚注より

14　細野はるみ氏「女二の宮の縁談」（『講座源氏物語の世界』（第八集）有斐閣、一九八三年）

15　藤本勝義氏「女二の宮を娶る薫―「宿木」巻の連続する儀式」（『源氏物語の表現と史実』、笠間書院、二〇〇二年）

16　中井賢一氏「『源氏物語』明石中宮論―明石中宮の機能と権力機構としての宇治―」（「中古文学」二〇一三年、五月）